

猫をいかすのは誰か
ー共生と共存社会のリアリティー

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
小池英梨子

「吾輩は猫である。」として書き綴っていきたいことがある。ペットでもなく、野性でもない「飼い主のいない猫」という存在に対し、共生と共存の狭間で様々な葛藤と向き合いながら、従来の殺処分という短期的で排除型の対策から脱却し、共存へむけた継続的取り組みが活発になりつつある。本研究では、それら長期的共存型のコンフリクトマネジメントの有効性の検討と「生の現在」への考察を深めることを目的とする。

平成25年度の猫の殺処分数は全国で99,566頭、犬の殺処分28,569頭に比べ、約3.5倍にのぼる。このような現状の中で、近年、飼い主のいない猫問題の解決にあたり、殺処分ではなく「地域猫」として管理する対策が効果を挙げ注目を集めている。「地域猫」とは、広義には「TNR（Trap/捕獲し、Neuter/不妊去勢手術を行い、Return/元の場所に戻す）と継続管理（Management）を施された飼い主のいない猫」のことである。したがって「地域猫活動」とは、「飼い主のいない猫」から「地域の猫」として管理していく活動である。本研究では、日本における飼い主のいない猫に対する活動の変遷をまとめ、筆者が直接関わった5つの事例を詳細に書き出し、それぞれの取り組みの理論ベースや構築過程を明らかにし、分析と考察を行った。

結果として、様々な「地域猫活動」は共通に「TNR-M」の構造を持ち、システム論的思考を理論ベースとし、価値観や立場の違う者同士の利害の一致が得られ形成されていた。コンフリクトマネジメントの視点からも猫とは直接関係のない変化や効果を生み、コンフリクトを積極的に活用している TNR-M は、「長期的共存型のコンフリクトマネジメント」と言える。その背景には、猫と人の二者関係ではなく、輻輳的な変化が生み出す複数の共存が明らかになった。